

表出と疑問

飯田 隆

2022年11月

1

フレーゲ以降の分析的伝統に属する哲学者のなかで、一般のひとがもっている哲学者の観念にもっともよく当てはまるのは、ウィトゲンシュタインだろう。そうした観念によれば、哲学者とは、人生についてそこから何か深い知恵を学ぶことができるようなひとのことである。ウィトゲンシュタインがこの条件を満たすと思われる理由はふたつある。ひとつは、かれが送った人生がさまざまな伝記的興味に満ちたものであることがあり、もうひとつは、かれの著作の随所で出会う印象深い章句である—あまりにも有名な「語りえないことについては、沈黙すべきである」から「ライオンが話せたとしても、それをわれわれは理解できないだろう」といったものまで、どれも何か深遠な響きをもっている。

だが、「人生についての深い知恵」などというものは別のところに哲学の目的はあると考えるひともある。大学のようなアカデミックな場所で哲学に従事しているひと、とりわけ、分析的伝統のもとで哲学を行っているひとの大半は、そう考えているにちがいない。そういうひとのなかにはウィトゲンシュタインに哲学としての価値を認めないひともあるかもしれないが、たぶん多くは、理論的営みとしての哲学にとってもウィトゲンシュタインから学ぶことはあると認めるだろう。さらには、自分の行っているような哲学において、ウィトゲンシュタインが、単に重要なだけでなく、偉大な存在であると言うひともある。もちろん、そう言うひとは、ウィトゲンシュタインの偉大さがどこにあるかを説明する義務がある。

ウィトゲンシュタインの偉大さを納得するのに、いちばんよい方法は、かれの議論の具体的な例をみてることである。そのよい例は、言葉の意味というものが、その言葉を耳にしたり目にしたときにひとがもつ、こころのなかのイメージのようなものではありえないことを示すウィトゲンシュタインの議論である¹。

¹[Wittgenstein 2009] §§139–141。これがどのようなものであるかは、[飯田 2022] 2・1節（とくに七四～七六頁）で紹介したので、詳しくはそちらを見てほしい

言葉の意味が、言葉によって引き起こされる、こころのなかのイメージのようなものであるという考えは、とくに珍しい考えではない。実際、このように考えるひとは普通にいるだろう。また、そう考えることに何か問題があるとも思わないだろう。だが、こうした考えが自然なものであるとみえるのは、ここで言われている「こころのなか」ということについて、ひとがきちんと考えていないからではないだろうか。いまウィトゲンシュタインのような議論がなかったものとして、言葉を理解することが、それに対応するイメージをこころにもつことだとしてみよう。そうすると、言葉の理解とは、こころで生じる出来事であることになる。だが、こうした出来事が生じるころとは何だろうか。そこでは、いろいろなことが生じるように思われるが、それがどのような機構で生じるのかは神秘に包まれている。

言葉の意味が、それを見聞きするときこころのなかに生じるイメージではないと示すことは、こころを、そうした神秘的な場所だと考える誘惑のひとつを断つことである。それゆえ、ここで問題になっているのは、言葉の意味ということだけではなく、もっと広い範囲にわたる事柄である。

いわゆる後期ウィトゲンシュタインの議論の多くは、こころを、何か不思議な場所、神秘的な媒体と考えようとする、さまざまな誘惑を断ち切ろうとする目的をもっている。こうした誘惑は、日常の思考のなかにひそんでいる。したがって、ウィトゲンシュタインが戦う相手は、専門的な哲学者たちではない。むしろ、かれの相手は、ウィトゲンシュタイン自身も含めて、われわれのひとりひとりのなかの哲学者であると言った方がよいだろう。専門としての哲学について何も知らない者であっても、哲学の罠にはまることは必ずある。罠にはまっているかどうかは、日常から離れた言葉遣いに現れるとウィトゲンシュタインは考える。かれがまずすることは、そうした言葉遣いを日常の言葉遣いに引き戻すことである。ウィトゲンシュタインは、あくまでも日常のレベルにとどまって、そこにひそむ罠をひとつずつ見つけては解除することに専念する。そうすることを通じて、かれは、こころとは何かという、誰にとっても切実な問いを問うことがどういうことであるのか、この問いに対処する正しいやり方はどんなものなのかを、われわれに教えてくれている。哲学者としてのウィトゲンシュタインの偉大さはこの点にあると私は思う。

2

哲学者としてのウィトゲンシュタインの偉大さを示すもうひとつの例は、

- (1) 痛い。
- (2) 家に残してきた犬が心配だ。
- (3) かれはもう駅に着いていると思う。

といった、心的な事柄に関する一人称現在の文を用いた発話は、三人称や過去時制の文を用いた発話とちがって、事態の記述や報告を行っているのではなく、感覚や感情や思考の表出 (Äußerung, avowal) あるいは表現 (Ausdruck, expression) を行っているという、ウィトゲンシュタインの観察である²。

(1)–(3) のような文を用いた発話の特異性を明らかにするためには、まず、(1)–(3) の発話がされたのと同じコンテキストで、発話者以外のひとが「同じこと」を表現しようとするとき、どんな文を使うかを見ておく必要がある。いちばん簡単なのは、(1) の場合なので、以下では、主にこれを取り上げる。(1) の発話者以外の人物が、(1) の発話に対応して使える文は、次のようなものだろう。

(4) 痛がっている。

(5) 痛そうだ。

(6) 痛いと言っている。

いわゆる人称代名詞はいっさい使われていないが、(1) が一人称の文であることは明瞭である。それに対して、(4)–(6) が一人称以外の文であることは、これも人称代名詞なしにわかる³。

さて、(1) の特異性は、それが (4)–(6) と次の二つの点でちがうことに現れている⁴。

(A) (4)–(6) の発話のどれについても、そう言うひとに、「それはまちがっている」と反対したり、「本当じゃないんじゃないか」と疑いを表明することは、十分ありうることである。それに対して、(1) と言っているひとに、「まちがいだろう」とか「そうじゃないんじゃないか」と言うことはできない。せいぜい「嘘を言っているだろう」とか「ふざけているんじゃないか」といった疑いを表明することしかできない。つまり、相手がわざと嘘を言っているのではないことがはっきりしているとき、(1) の発話はそのまま受け入れられる。

(B) (4)–(6) の発話のどれについても、そう言うひとに、「なぜそう思うのか」と尋ねることができる。それに対して、(1) と

²ウィトゲンシュタインにおける表出の概念を概観したものとして、[Glock 1996] の “avowal” の項目を見られたい。[Jacobson 1996] も参照。

³(2) について同様に、それに対応する一人称以外の文を考えれば、次のような文があげられる。

(i) 家に残してきた犬を心配している。

(ii) 家に残してきた犬が心配なようだ。

(iii) 家に残してきた犬が心配らしい。

(3) も同様である。「思う」の代わりに、「思っている」、「思っているようだ」、「思っているらしい」などを使うことになろう（「思うようだ」、「思うらしい」も可能かもしれないが、私の耳には少し不自然に聞こえる）。

⁴(2) と前註の (i)–(iii) のあいだにも同様のちがいがある。

言うひとに「なぜそう思うのか」と尋ねることはできない。もちろん、尋ねるだけのことならできるが、そう尋ねるひとは、何か根本的なことがわかっていないひとである。つまり、(4)–(6)の発話については、そう言える証拠を要求することがありうるが、(1)は、証拠を必要としない。

(2)と(3)についてもまた、(1)と同様のことが言える。(3)については、「なぜそう思うのか」と尋ねることができると思われるかもしれないが、それは、かれがもう駅に着いていると、どうして思うのか尋ねられるということであって、かれがもう駅に着いていると自分が思うと、どうして思えるかと尋ねられるということではない。

こうして(1)–(3)は、(A)という特徴をもつことにより「确实」であり、(B)という特徴をもつことにより「直接的」であると考えられてもおかしくない。デカルトのように、ここに、すべての認識の确实な基礎を見出せると考えるような哲学者も出てくる。だが、デカルトという名前を聞いたことのない人でも、こころという、その持ち主にだけアクセスが許される、何か特別な領域があるといった考えをもっていないだろうか。つまり、他人のこころは、その他人の振る舞いや言葉を通じて間接的にしか知ることのできない領域であるのに対して、自分のこころは、直接的な仕方では確実に知ることができるという考えである。

ウィトゲンシュタインの偉さは、(1)のような文を用いた発話と、(4)–(6)のような文を用いた発話のあいだの、こうしたちがいを、前者が确实で直接的な知識を与えるのに、後者はそうではないという仕方とは別の仕方を見ることを、われわれに教えてくれるところによく現れている。かれによれば、両者は、どちらも言葉を使って何かをしているが、たがいにまったくちがう種類のことをしている。前者は、泣いたりうめいたりする代わりに言葉を使って痛みを表現(表出)することであるのに対して、後者は、痛みにかかわる出来事を報告(記述)している。(4)–(6)のような文を用いた発話について、そこで言われたことが真か偽かを問題にできるのに対して、(1)を用いた発話には、嘘をついていないかどうか問題にできるだけであって、真とか偽とすることはできない。それは、泣くことやうめくことには、詐(いつわ)っていないかどうかだけが問題にできるだけで、真偽が言えないのと同様である。

こう考えるならば、(1)の発話が、(4)–(6)のような文の発話に対して、(A)と(B)という特異性をもつことの意味は、まったくちがって見えてくる。(1)の発話は、その発話者のこころのなかで生じている出来事を直接観察することによって得られた報告として、「确实」で「直接的」なのではない。(1)の発話を記述と考えるからこそ、それが确实で直接的に知られる真理を表すと思うことになる。

こころが何か不思議な場所だと考えたい誘惑は、いろいろな形で現れる。言葉の意味をこころのなかのイメージのようなものだと考えることが、

そのひとつだった。「歯が痛い」や「こどもが心配だ」のような発話が、「痛がっている」や「痛そうだ」のような発話と比較できる、こころのなかの出来事の記述だと考えることも、同じである。こころについてのまちがった描像は、何かひとつの誤りから生じたものではない。そこには、多種多様の多くの誤りが関与している。ウィトゲンシュタインは、そのひとつひとつを丹念に、また倦むことなく取り上げて、それがなぜ誤りであるかを明らかにしようとした。だが、かれの偉大さは、それだけではない。かれは、このことを具体的な例を通じて行っているが、そうした具体例をめぐる議論はどれも、ここで取り上げた二つの具体例についてのものと同様、こころについてのまちがった描像を壊すというかれの大きなプロジェクトということを離れて、それ単独で取り上げても、簡単には汲み尽くせない大きな哲学的興味をもっている。さらに言えば、ウィトゲンシュタイン自身からの賛成は得られないだろうが、かれの議論の先がどうなるかを考え、ある種の理論を構想することさえできる。以下では、ここで取り上げた二つのうちの後者、すなわち、記述と表出という区別について、改めて考えてみたい。

3

これまで述べてきたように、哲学者としてのウィトゲンシュタインの偉大さを認める点で、私は人後に落ちないつもりだが、かれの議論にしばしば不満を感じるのも事実である。たとえば、言葉の意味がこころのなかのイメージのようなものではありえないことを示した、かれの議論は決定的なものだと私は考える⁵が、「それでは、言葉の意味とは何か」という問いに対してかれが言うのは、「『意味』という言葉が使われる**多くの場合—すべての場合**ではなく—に、それは、言語におけるその使用だと説明できよう」([Wittgenstein 2009] §43—強調は原文通り)でしかない。もう少しその先を知りたいと思わないだろうか。まして、この同じ節で、続けて「名前の**意味**は、しばしば、その担い手を指すことで説明できる」と言われている以上、他の種類の言葉についてはどうなのかと聞きたくなる。

表出と記述という区別は、そのどちらに属するのかがはっきり言えなかったり、コンテキストで変わったりするような発話もあるが、(1)と(4)–(6)のように、この区別が明瞭に当てはまる例があることは認めてよいだろう。この区別について、もっと説明が必要だと思われるのは当然だが、それよりも気になるのは、表出文とそれに対応する記述文とのあいだの関係である。こうした説明が必要だと思われるのは、一方で、表出文が真でも偽でもありえないのならば、表出文と記述文のあいだに論理的関係はありえないはずだが、他方で、同じ言語表現が現れている以上、両者のあいだには何らかの意味的關係がなくてはならないと思われるからである。もっとも基本的には、表出文に

⁵[飯田 2022] 七六頁。

現れる言語表現の意味が、記述文における同じ表現の意味と異なることを考えることはできない。それは、「痛い」とか「心配だ」とか「思う」といった表現にとどまらない。たとえば、

(7) 十年前に受けた手術の痕が痛い。

といった表出文があることからわかるように—また、(2)や(3)も示しているように—、特定の語彙に限られるわけでもなければ、単純な表現だけに限られるわけでもない。(7)と

(8) 十年前に受けた手術の痕が痛いらしい。

とで、「十年前」とか「手術」といった言葉の意味がちがうとは思えないだろう。

表出文は真偽をもたないとする立場を「単純表出主義 (simple expressivism)」と呼び、自らの立場を「ネオ表出主義 (neo-expressivism)」と名付けたバー＝オンは、主にこうした考慮から、表出文もまた真偽をもつとしている。(1)–(3)のような文もまた、意味論的構造をもつゆえに、真理条件をもち、したがって真偽が言えるという ([Bar-On 2004] pp. 250–1)。彼女によれば、表出文を用いた発話には、行為 (act) の側面と、行為によって生み出される成果 (product) の側面とがあり、「表出」は、話者の心理状態を表出するという行為を指す場合も、そうした行為によって生み出される言語的トークンを指す場合もある。後者は、意味論的構造をもつゆえに、真偽をもつというのである。

表出文にも真偽を帰すべきだとする、もっと具体的な議論として、よく引かれるのは、表出文は、論証に現れたり、否定や条件法のような真理関数的操作の対象となりうるというものである⁶。たとえば、

(9) 痛くない。

が、(1)が言われたのと同じコンテキストで同一の人物によって言われたら、矛盾が生じるだろう。(1)が真理値をもつのでなければ矛盾は生じないように思われる。あるいは、

(10) かれがもう駅に着いていると思うならば、心配はしない。

は、表出文(3)を前件にもつ条件法の文である⁷(10)について真偽を問題にできるのならば、(3)についても真偽が言えるのでなくてはならない。

もうひとつ例を挙げよう⁸。「この部屋には、歯が痛いひとはだれもいないよね」と問いかけられて、「ぼくは歯が痛い」と答えるひとは、問いかけた人

⁶[Jacobson 1996] p. 19.

⁷(3)の「かれは」が、(10)で「かれが」に置き換えられているのは、複文中に文を埋め込むときに必要となる変形のせいである。

⁸[Finkelstein 2010] p.194.

の主張が偽だと言っているのではないだろうか。ということは、「ぼくは歯が痛い」という表出文は真偽をもっているということだろう。

だが、表出文に帰すことのできる「真偽」とは、本当にその名に値するものなのだろうか⁹。記述文、たとえば「山手線が止まっている」のような文の発話については、言われたことが真か偽かということと、(意図的に)嘘をついてないかどうかとは別のことである¹⁰。しかし、(1)–(3)のような典型的な表出文について、発話者が嘘をついているつもりではないのに偽であることを言うという場合は考えられるだろうか。

(1) のような文についてバー=オンは、次のような例を挙げている。ある種のイニシエーションの儀式で、試練が与えられると聞いている新人が、儀式の一段階で、首筋に氷をあてられて「痛い」と叫ぶ場合である ([Bar-On 2004] pp. 322f.)。バー=オンは、この発話は、本心からなされたが、本当は痛くないのに「痛い」と言うことで、偽であることを言っていると考える。しかし、これはかなり微妙な例ではないだろうか。「痛い」と言ったひとは、痛みの原因に関してまちがえたのかもしれないが、痛いと感じた点では、まちがえていないようにも思われる。同様に、冷たい水に手を入れて「痛い」と言うひとの場合はどうだろうか。このひとは「痛い」と言うことで偽であることを言っているのだろうか。

感情や思考がかかわる場合になると、本人が本気で言っていることが、まちがっているという可能性は、十分にある。一般に「自己欺瞞」としてくくられる現象である。たとえば、私が、机のうえの書類を見ながら、

(11) 今日中にこれを片付けるつもりだ。

と言ったとする。私は本気でそう言ったとしても、私のことをよく知っているひとは、私が本当に書類を片付けるつもりがあるとは思わず、しかも、そのひとの方が正しいということがありうる。こうした場合、私は、自分が何を意図しているかについてまちがっているのであって、嘘をついているのではないということになるのだろうか。それとも、このような場合は、表出がもつとされる特徴 (A) —嘘をついていると思われるのでない限り、正しいものとして受け入れられる—を満たさないで、そもそも表出ではないと言うべきなのだろうか。

いずれの例も興味深い問題を提起するが、表出文と記述文との関係を付けるということであれば、そうした問題に決着をつけずにすむ方法がある。それは、どの表出文も真または偽でありうると主張するのをやめることである。だが、それではネオ表示主義が批判した単純表出主義に後戻りするだけではないか。ここで強調しなければならないのは、表出文に真偽を帰すことがで

⁹以下については、[Rodriguez 2012] から、さまざまな示唆を受けた。

¹⁰日本語の「嘘をつく」は、英語の「lie」とちがって、発話者の意図とは関係なく、ただまちがったこと—偽であること—を言う意味もあるが、ここでは、意図的に自分が本当だと思っていることとは反対のことを言うという意味で用いる。

きなれば、それが意味論的構造をもつことは説明できないという推論は誤りだということである。疑問文の意味論の存在が、この推論の誤りをもっとも明瞭に示している。疑問文は真偽をもたないにもかかわらず、ある種の疑問文については、真理条件意味論の枠内でその意味を与えることができる。たとえば、疑問文

(12) どの先生がどのこどもを教えましたか。

に真偽を帰することはできないから、その真理条件ということは問題にならない。しかし、どんな範囲の先生とこどもが(12)で話題でなっているかがわかれば、(12)への可能な答えが何であるかもわかる。そのうちのどれが正しい答えであるかを知らなくとも、可能な答えの全体を知っているひとは、(12)を理解していると言えるだろう。よって、こうした可能な答えの全体を、(12)のような疑問文の意味と同一視することができて、可能な答えはすべて真もしくは偽である文であるから、(12)自身は真偽をもたなくとも、真理条件的に意味を与えられたことになる。このようなアイデアを発展させることによって、疑問文の意味論が作られたが、これは形式意味論の重要な成果のひとつである¹¹。

問題は、(1)のような表出文と、それに対応する(4)–(6)のような記述文との関係を明らかにすることであった。より一般化するならば、表出文が言語のなかで占める位置を明らかにすることだと言ってもよいだろう。私の提案は、疑問文の意味論をモデルにしようということである。つまり、表出文が真偽をもつと考えないとしても、真偽をもち、真理条件をもつ別の文を介して、意味を与えることができると考え、その機構を明らかにしようというのである。そうすることは、たぶん、ウィトゲンシュタインがそこに籠めようとした意味とはちがうだろうが、われわれの言語の一側面についての「見通しのきいた描写」([Wittgenstein 2009] §122)を与えようとするのである。

4

まずは、表出文(1)「痛い」に対応すると考えられる記述文が何であるかを、改めてはっきりさせることから始めよう。そうした文の候補としてこれまで挙げてきたのは、次に再録する(4)–(6)である。

(4) 痛がっている。

(5) 痛そうだ。

(6) 痛いと言っている。

¹¹[Higginbotham 1993]、あるいは、[Groenendijk and Stokhof 1997]を見られたい。

これらはたしかに (1) の発話を聞いたひとが言いそうな文ではあるが、(1) に単純に対応するとは言い難い要素を含んでいる。日本語は一般に他人の心理状態に踏み込むような表現を避ける傾向がある。したがって、英語のように、一人称の「I am in pain」から、二人称の「You are in pain」や三人称の「She is in pain」が作れるようにはなっていない¹²。よって、(4) と (6) は、痛みの振る舞いを記述するだけであり、(5) の場合には、「そうだ」のような様相表現を伴っている¹³。他人の心理状態にもっと踏み込んだ言い方としては、次のようなものが考えられる（A とは、話題となっている人物のことであるが、だれが話題となっているかがコンテキストから明瞭の場合、ふつう「A は」は省略される）。

(13) [A は] 痛みを感じている（んだ）。

(14) [A は] 痛みがある（んだ）。

(4)–(6) のいずれについても、それに続けて、「本当に」とか「実際」と言っても、(13) や (14) が言われることは十分ありうるだろう。その場合、(13) や (14) は、痛みの振る舞いの記述ではなく、また、推測にとどまらない仕方でも、他人の痛みという心理状態を記述していると考えてよいだろう（ここに示したように、会話では文末に「んだ」を付ける方が自然なのは、他人の心理状態を直接表現することがためらわれることの現れだろう）。

一般に、心理状態を表す動詞の「ている」形は、三人称で他人の心理状態を記述するのに使えるように思われる。たとえば、(2) と (3) を次と比較されたい¹⁴。

(15) 家に残してきた犬を [A は] 心配している（んだ）。

(16) かれはもう駅に着いていると [A は] 思っている（んだ）。

他方、「痛い」のような、いわゆる主観形容詞については、いくらか不自然な表現になるが、「感じる」のような動詞を用いて、「まぶしさを感じている」

¹²日本語では、過去（非現在）時制の文に関しても、一人称とそれ以外とのあいだに非対称性がある。

(i) 痛かった。

(ii) 家に残してきた犬が心配だった。

(iii) かれはもう駅に着いていると思った。

といった一人称過去の文の発話を聞いたひとが、発話者の過去の状態を伝えようとするときには、「痛がっていた」とか「心配していた」とか「思ったそうだ」といった表現を使わなければならない。しかしながら、(i)–(iii) には、現在形のときのような一人称特権はない。(i)–(iii) のように言うひとが、記憶ちがいをしていることは十分にありうるから、まちがったことを言っていると反対することも、ありうる。(i)–(iii) は、一人称現在の場合とはちがって、表出ではなく、記述あるいは報告である。日本語の一人称過去のこうした特異性は、他人の心理状態に踏み込むことをきらいという日本語の特性に由来するものであって、表出と記述の区別ということとは別だろう。

¹³「痛そうだ」の他に、「痛いらしい」や「痛いようだ」も同様の表現である。こうした表現は「evidentials」と呼ばれる。[Murray 2017] を参照。

¹⁴註 3 も参照。

とか「うれしさを感じている」といった表現に頼ることになるだろう¹⁵。

一般に、一人称の表出文 S に対して、それに対応する三人称の記述文のなかに、振舞の描写でもなければ、推測のような様相を含まないという意味でミニマルな文 $D(S)$ を見つけることができると考えよう¹⁶。この仮説が正しいかどうかは言語学的に確かめられなければならないが、もし仮に、そうした文を見出せない表出文 S があったときには、そのままの形では文法的に正しくなかったり、不自然な文になったとしても、 S に対応する三人称の記述文 $D(S)$ を日本語に追加することが許されると考えることにする。

さて、これで私が提案したい表出文の意味論を述べる準備ができた。前節の終わりで述べたように、疑問文は真偽をもたないが、その答えとなりうる文は真偽をもつゆえに、疑問文の意味論は、その答えとなりうる文の意味を通じて与えることができる。これと同様に、表出文そのものは真偽をもたなくとも、それに対応する記述文は真偽をもつから、表出文の意味論は、対応する記述文の意味を通じて与えられる。こうして、疑問文を真理条件意味論に組み込むことができたように、表出文もまた真理条件意味論に組み込むことができる。それゆえ、表出文に現れる語や句が、記述文に現れる場合と異なる意味をもつと考える必要はないのである。

表出文の意味論は、二つのテーゼによって与えられる。第一のものは、こうである。

- (I) 表出文 S の意味は、それに対応する記述文 $D(S)$ の意味によって特徴づけられる¹⁷。

疑問文の意味論において、疑問文 Q の意味は、その可能な答えから成る「分割 (partition)」と呼ばれる集合 $\pi(Q)$ によって定まる。それが規定する

¹⁵心理動詞の「ている」形がなぜ、一人称以外でも、「ようだ」とか「らしい」といった様相表現を伴わずに使えるのかは、日本語学のなかでもすでに一定の研究の蓄積があるが、さらなる検討が必要だと思われる。

¹⁶真理条件意味論の枠組みのなかで考えている（真理条件の意味論の枠組み以外の枠組み—たとえば、言明許容性条件に基づく枠組み—のなかで考えるならばどうなるかは、興味深い問題であるが、ここで考察することはできない）から、記述文 $D(S)$ は、その発話のコンテキスト C に相対的な真理条件をもち、これはメタ言語 M のなかで与えられる。ところで、 M は、無時制であるだけでなく、無人称でもあるのが通例である。しかし、無時制で無人称の言い方というのは、自然言語ではありえない。数学や物理学の理論を述べるのであっても、日本語や英語で述べるならば、三人称で現在（非過去）時制の文を使うしかない。形は現在で三人称だけれども、本当は無時制で無人称だと言い張っても、あまり説得力があるようには思えない。しかし、他にやりようがないのも事実である。そのうえで、たとえば、(13) のコンテキスト C における真理条件を述べれば、次のようになる。

A を C で話題となっている人物、 t を C によって決まる時（期間）とする。このとき、文「痛みを感じている」が C で真であるのは、A が t で痛みを感じているとき、かつ、そのときに限る。

¹⁷本当は、コンテキストへの相対化が必要である。二通りの相対化が可能である。ひとつは、文タイプとしての表出文の意味を特徴づけるために、「すべてのコンテキスト C において」と一般化する方法であり、もうひとつは、個別のコンテキストごとに表出文の意味を特徴づける方法である。さらに、同一の文タイプが、あるコンテキストでは表出文としてはたらく、別のコンテキストでは記述文としてはたらくこともありうる ([Glock 1996] p. 52)。よって、コンテキストへの相対化は結構複雑なものになりうる。

分割がたがいに等しい疑問文は、その意味が等しいとされる。それと同様に、コンテキスト C で発せられた二つの表出文 S と S' について、 $D(S)$ と $D(S')$ の C での真理条件が等しいならば、 S と S' の意味もまた C において等しいとしてよいだろう。

複雑な表出文は、「心配だ」や「思う」のように、超内包的 (hyperintentional) な文脈を作る表現を含むことが多いので、実際には、この基準によって、同一の意味をもつ異なる表出文とは、単純なものに限られそうである。だが、そうすると、次のような疑惑が生まれるかもしれない。すなわち、異なる表出文には、異なる真理条件をもつ記述文が対応することが多いのであれば、表出文とそれに対応する記述文とを意味的に区別する必要はないのではないかという疑惑である。

だが、そう考えることは、表出文を用いるポイントと、記述文を用いるポイントのちがいを見失うことにつながる。疑問文や表出文が示すことは、真理条件だけが意味のすべてではないということである。「A は痛みを感じている」 (= (13)) のような記述文は、「事態はこうである (Es verhält sich so und so)」 (『論理哲学論考』四・五) と述べる文として、それを主張することは、A に何が起きているかを述べることであり、事態がその通りであれば真であり、そうでないならば偽である。それに対して、(1) は、同様に、発話者である自分、すなわち、A に何が起きているかを述べているのではない。(1) と言うことで A は、自分の痛みを表出しているのである。A の発話を聞いて、ひとは (13) が記述している事態が成り立っていると判断するが、A の発話はそうした事態が成り立つことを報告しているわけではない。

よって、表出文の意味論を構成する第二のテーゼは、こうなる。

- (II) 表出文 S のコンテキスト C での発話は、 C で、それに対応する記述文 $D(S)$ によって記述される発話者の心理状態の表出 (表現) である。

疑問文の意味論が、各々の疑問文の意味がどう特徴づけられるかを与えるだけでなく、疑問文を発することが何のためであるかも教えてくれるものでなくてはならないと同様、表出文についても、それが何をするものであるかを教えるのが、(II) である。このことを、より詳しく述べればこうなる。

疑問文の理解ということには、二つのことが含まれている。第一に、疑問文とは何をする文なのかという理解であり、第二に、個々の疑問文について、それが何をしているのかの理解である。前者について言えば、もっとも基本的には、疑問文とは、他人がもっていて自分もっていない情報を得るための手段である。したがって、疑問文は、聞き手からの答えを要求する。しかも、その答えは発せられた疑問文にとって適切なものでなくてはならない。こうして、個々の疑問文を理解するとは、それがその適切な答えとして何を要求するかを理解していることである。疑問文の意味論は、まさに、これを与えている。

同じことが、表出文についても言える。ここでも、その理解には、表出文とは一般に何を表す文なのかという理解と、個々の表出文について、それが何を表しているのかの理解という、二種類のもが含まれている。いま提示したような表出文の意味論は、まさに、この二種類の理解が何に存するかを与えている。まず、(II) が述べるように、表出文は、発話者の心理状態を表出(表現)することで、自分がそうした状態にあることを聞き手に伝えるためのものである。個々の表出文を理解するとは、それを通じて聞き手が、発話者がどのような心理状態にあるか—それは、(I) が示すように、対応する記述文が記述するものである—を知ることである。

ただし、言語が提供するような複雑な道具は常に、本来の用途とはちがった仕方でも使うことができる。算数の問題を出してその答えを尋ねる先生は、自分のもっていない情報を得るために疑問文を用いているのではない。また、「窓を開けられますか」と聞く人も、窓を開ける能力を相手もっているかを知りたくて疑問文を発しているのではない。表出文についても、それが、話者の心理状態を表現して、自分がそうした心理状態にあることを伝えるためのものであるということを、逆用することが可能である。たとえば、痛みをまったく感じていないのに「痛い」と言ったり、残してきた犬のことを心配などしていないのに「残してきた犬が心配だ」と言ったりする場合である。これは一般に「嘘をつく」ことだと言われる。

これは、山手線が止まってなどいないことを知りながら、「山手線が止まっている」と言うような場合、すなわち、記述文を用いて、嘘をつく場合と同じだと思われるかもしれないが、二つの重要な点でちがう。第一に、痛くないのに「痛い」と言うのは、歯が痛くないのに頬をおさえうめいてみせるといった詐りの動作と連続した行為である。山手線が止まっていないのに止まっているように思わせることは、「山手線が止まっている」と言う以外の手段で実現できるかもしれないが、そうするための決まった振舞いのレパートリーがあるわけではない。第二に、記述文の場合、嘘をついているかどうかは、言われた文の真偽と独立である。山手線は止まっていないと思いながら、「山手線が止まっている」と言うひとは、たしかに嘘をついている。しかし、実は、山手線は止まっていて、このひとは本当のこと—真であること—を言っているというのは、ありうることである。これに対して、「痛い」と詐るひとは、本当は自分では気づかずに痛みを感じているということは意味をなさない。

つまり、表出文の場合、真偽ということは問題にならず、そこで問題となるのは、表出文の発話が詐りでないかどうかだけであると私は考える。ここですぐ出てくる疑問は、3節で話題にした自己欺瞞の場合はどうなるのかというものだろう。この場合、「今日中にこれを片付けるつもりだ」というような意図を表明している文の発話は、詐るつもりなしになされたゆえに嘘ではないが、本当はそうした意図は存在しないゆえに偽であると言うべきではないだ

ろうか。

自己欺瞞の場合を考えることは、「表出文」という概念がもともと、望みうるような明確さを備えていないことを気付かせてくれる。これまで、表出文に与えてきた規定は、心的な事柄に関する一人称現在の文ということではなかった。しかし、「心的な事柄に関する」という限定は、あまりに漠然としているゆえに、表出文の範囲を確定することに成功していない。自己欺瞞という現象の存在は、本人よりも他人の方が正しい判断を下すような心理状態があることを示している。よく挙げられる例は、嫉妬の例である。本人は「ちっとも嫉妬なんかしていない」と言い張るが、まわりの人間には嫉妬していることが見え見えであるといった事例は、比較的ありふれたものだろう。こうした事例は、表出の発話からは除外されなければならないと私は考える。そうするひとつの方法は、先に表出の特徴として挙げられた (A) と (B) を満足するものだけが表出文であると規定してやることである¹⁸。

よって、(II) は、次のような帰結をもつものとして理解される。

(Av) コンテキスト C における表出文 S の発話は、対応する記述文 $D(S)$ が C で真であることの、阻却可能 (defeasible) ではあるが、特権的な (privileged) 証拠となる。

ここで「阻却可能ではあるが、特権的な」とは、 S の発話者が C で嘘をついていると思われるのでない限り、受け入れられるべきであるということである。つまり、(Av) は、表出文の特徴 (A) を述べ直したものにすぎない。

「痛い」とか「残してきた犬が心配だ」とひとが言うのを聞いて、その通りだろうとわれわれが思うのはなぜだろうか。こうした事柄について本人の言うことはこれまで概して正しかったといった経験から帰納して、そう思うのだろうか。そうではあるまい。われわれがそうするのは、われわれが言語をマスターしているからであり、われわれがマスターしていることの中には、表出文という文のクラスが存在することを知っており、そうした文によって何をすることができるかを理解していること—(Av) はその一部である—が含まれているからである。

(II) はまた、表出文の特徴とされた (B) も、その帰結としてもつ。表出は、その原因を問題にすることはできるが、理由を問えるようなものではない。頬を押さえたり、うめいたりするひとに、「なぜそうしているのか」と問うひとは、「痛いから」という答え以上のものを要求しないだろう。よって、「歯が痛い」と言うひとに「なぜそう言うのか」と聞いても、「歯が痛いから」以上の答えはありえない。「心配だ」とか「思う」といった、特定の非言語的振舞いと結びついていない表出についても何ら変わるところはない。「心配だ」と言うひとは、心配しているという感情を表出 (表現) しているのであって、

¹⁸ウィットゲンシュタインも同様に考えたと思われる節がある。「心理的概念を扱うプラン。[改行] 心理的動詞は、三人称現在では観察によって検証されるが、一人称現在はそうでない」([Wittgenstein 1967] §472)。

その心配が合理的な心配であるかは問題となるかもしれないが、心配しているという感情の表現そのものは、証拠とか根拠ということとは無縁である。

5

最後に、論証に現れたり、否定や条件法のような真理関数的操作を適用できるゆえに、表出文にも真偽を帰すべきだという議論（3節）に答えておこう。ここはまた、疑問文の意味論をモデルとすることの利点が発揮される場所である。

疑問文の意味が、その可能な答えが何であるかによって特徴づけられるのであれば、そうした答えのあいだの論理的関係を通じて、疑問文のあいだに論理的関係を定義することができる。たとえば、「どの先生がどの生徒を教えたか」という疑問文への（完全な）答えがわかれば、「どの先生が生徒を教えたのか」という疑問文への（完全な）答えがわかるから、前者は後者を「論理的に含意する」と言えるだろう。また、前者への（完全な）答えは、「どの生徒も教えた先生がいる」という平叙文の真偽を決定するから、ここにも論理的関係がある。

これと同様に、それ自体は真偽をもたない表出文のあいだに論理的関係を定義することができる。つまり、二つの表出文 S と S' について、対応する記述文 $D(S)$ と $D(S')$ のあいだに論理的関係があるならば、同じ関係が両者のあいだに成り立つとしてやればよい。否定辞「ない」を含む

(9) 痛くない。

を考えよう。この文を表出文「痛い」(= (1)) の否定であると考えるときではない。(9) は、それ自体で表出文である。(9) に対応する記述文

(17) [A は] 痛みを感じていない。

は、同じコンテキストで発せられた (1) に対応する記述文

(13) [A は] 痛みを感じている。

と矛盾する。よって、同一のコンテキストで発せられた場合、対応する記述文が矛盾するから、(1) と (9) は「矛盾する」と言ってよい。

次に、「この部屋に、歯が痛いひとはだれもない」という主張に対して、「ぼくは歯が痛い」と言って反論するひとの場合を考えよう。「ぼくは歯が痛い」はたしかに表出文であって、真偽が言えるような文ではない。しかし、この発話から、これに対応する記述文「発話者 A は歯に痛みを感じている」が真であると推論することは、A が嘘をついていると考える理由がない限り許される。よって、これは、先の一般的主張の反例となる。よって、表出文は、それに対応する記述文を通じて、記述文とも論理的関係に立ちうる。こ

れは、疑問文と平叙文とのあいだでも論理的関係を問題にできることと同じである。

条件法の文中に表出文が現れているようにみえる

(10) かれがもう駅に着いていると思うならば、心配しない。

は、どうだろうか。

まず、この文は、自然言語で条件法が現れる場合の多くでみられるように、何らかの一般性を含んでいる。いろいろな扱い方があるが、ここでは、状況 (situation) に対して一般化がなされていると考えよう¹⁹。つまり、(10) は、「かれがもう駅に着いていると私が思っているような状況ではいつも私は心配しないだろう」という具合に解釈される。前件に現れている文も、また後件に現れている文も表出文ではない。なぜなら、表出文がかかわるのは、現在現実になり立っている心理状態であり、(10) に現れている文はどちらも、現実とは異なる状況におかれた「私」への言及を含む文だからである。したがって、これらの文は、それぞれ「かれがもう駅に着いていると[私は]思う」および「[私は]心配しない」という表出文と結びついている記述文である。他方、

(18) かれがもう駅に着いていると思うから、心配しない。

の発話からは、

(19) かれがもう駅に着いていると思う。

(20) 心配しない。

という二つの表出がなされていると結論してよい。しかし、(18) は、この二つの表出文をそのまま含んでいるわけではない。(18) の構成要素となっている二つの文は、表出文ではなく、記述文だと考えなければならない。なぜなら、「P から、Q」には、(10) と同様の一般性が隠されているからである。

一般に、表出文をその構成要素としてもつ複合的な文があるようにみえるのは、表出文と、それに対応する記述文とを混同することから生じる。英語では、疑問文は、引用のなかでなければ、そのままの形で平叙文中に現れることはない。変形された形で間接疑問文に現れることができるだけである。これに対して、日本語では、疑問文そのものが平叙文中に現れているようにみえる。

(21) どの先生がどの生徒を教えたか (を) 私は知っている

がその一例である。だが、格助詞「を」に伴われうることが示しているように、ここで疑問文は、文としてではなく、名詞句として現れている。しかも、この名詞句が指すのは、「どの先生がどの生徒を教えたか」という疑問文への

¹⁹たとえば、[Elbourne 2005] を見られたい。

答えである。これが個別の疑問文の意味を特徴づけるもの、つまり、疑問文への可能な答えと密接な関係をもつことは偶然ではないはずである。そして、もちろん、このことは疑問文の意味論の一部としてすでに探究が進んでいる事柄である。

ご覧になったように、以上は表出文の意味論へのスケッチにすぎない。これをスケッチ以上のものにする、また、それがどのような哲学的教訓をもたらすか、とりわけ、われわれがウィトゲンシュタインから学べることと合致するかどうかを考察することは、またの機会—そうした機会があれば—のこととするしかない。

参考文献

- [Bar-On 2004] Dorit Bar-On, *Speaking My Mind: Expression and Self-Knowledge*. 2004, Clarendon Press.
- [Elbourne 2005] Paul D. Elbourne, *Situations and Individuals*. 2005, The MIT Press.
- [Finkelstein 2010] David H. Finkelstein, “Expression and avowal” in Kelly Dean Jolley (ed.), *Wittgenstein: Key Concepts*. Routledge, pp. 185–198.
- [Glock 1996] Hans-Johann Glock. *A Wittgenstein Dictionary*. 1996, Blackwell.
- [Groenendijk and Stokhof 1997] Jeroen Groenendijk and Martin Stokhof, “Questions” in J. van Benthem and A. ter Meulen (eds.), *Handbook of Logic and Language*. North-Holland, pp.1055–1124.
- [Higginbotham 1993] James Higginbotham, “Interrogatives” in K. Hale and S. J. Keyser (eds.), *The View from Building 20*. The MIT Press, pp.195–227.
- [Jacobson 1996] Rockney Jacobson, “Wittgenstein on self-knowledge and self-expression” *Philosophical Quarterly* 46 (1996) 12–30.
- [Murray 2017] Sarah E. Murray, *The Semantics of Evidentials*. 2017, Oxford University Press.
- [Rodriguez 2012] Ángel Garcia Rodriguez, “How to be an expressivist about avowals today” *Nordic Wittgenstein Review* 1 (2012)

[Wittgenstein 1967] Ludwig Wittgenstein, *Zettel*. ed. G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright. 1967, Blackwell.

[Wittgenstein 2009] Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*. Revised 4th edition by P. M. S. Hacker and J. Schulte. 2009, Wiley-Blackwell.

[飯田 2022] 飯田隆『言語哲学大全I 論理と言語』増補改訂版、二〇二二、勁草書房。